

氏 名 (国 籍)	ゴールドデン・バーバラ (米国)		
学 位 の 種 類	文 学 博 士		
学 位 記 番 号	博 甲 第 78 号		
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 56 年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当		
審 査 研 究 科	歴 史 ・ 人 類 学 研 究 科 文 化 人 類 学 専 攻		
学 位 論 文 題 目	南 島 に お け る 聖 地 信 仰 — ウ タ キ を 中 心 —		
主 査	筑波大学教授	文学博士	直 江 廣 治
副 査	筑波大学教授	文学博士	北 見 俊 夫
副 査	筑波大学助教授	文学博士	宮 田 登

論 文 の 要 旨

聖地とは信仰上また伝承的に神聖視されてきた一定区画の土地を指して言い、厳肅な神聖感と同時に何らかの禁忌を伴う畏怖感の両面に支えられて存在する。沖縄におけるこのような聖地の中核をなすものがウタキ（御嶽）と呼ばれるものであり、通例村落ごとに一箇所以上存在し、女性司祭者たちが共同体の五穀豊穡と繁栄のために祈願したり、祭りを営なむ場となっている。本論文は、長期にわたる綿密な実態調査に基づいて、ウタキ信仰の究明を意図したもので、400字詰原稿用紙675枚より成る論をなしている。

筆者はまず「序説」において、ウタキに関する主な先行業績を回顧し、多くの重要課題が未解決のまま残されている点を指摘し、その克服のための方法と資料について述べている。第1章「信仰の実態」では、調査地として選んだ小浜島（八重山諸島）・多良間島（宮古諸島）、與那覇（宮古島）・久米島（沖縄本島の西南）の4地域について、(1)ウタキに関する伝承、(2)ウタキの森の実態、(3)ウタキと祭祀、という3点を押えながらそれぞれウタキ信仰の実態を詳細に記述している。

第2章「ウタキの構成要素」では、木・石・香炉・火・水・神屋について論述している。まずウタキのほとんどは森や林の中に位置しているところから、聖地信仰の究明には植物が重要な観点になるとして、聖林の実態や神木に関する伝承、さらに神祭に用いられる植物の儀礼的意味について考察している。香炉に関しては、夙に折口信夫が指摘した「女の香炉」に対して、ウタキと屋内に「男の香炉」が存在する点を指摘している。また石・香炉・火の3要素の係わりにも言及している。水については、ソージと呼ばれるカー（湧水）の名称を取り上げ、ソージは仏教用語の「精進」に

発していると推定している。ウタキの古い形態では神屋は存在しなかったが、「籠り」の風習から神屋が成立したとして、神屋の成立過程・構造・建築材料・内部に安置される品物などについても論及している。

第3章「ウタキの位置と構造」では、4調査地域におけるウタキの位置を詳細に観察した結果、次の諸点を指摘している。(1)水源地には必ずウタキがある。(2)ウタキの多くは集落の後方にあり、風害から集落を保護する機能を果している。(3)先島の3地域では、各集落の海岸に海上安全を祈願するウタキがある。(4)ウタキの方向は、始祖が島に渡ってきた最初の間として意識されているところが多い。(5)遙拝所の類型に入るウタキは、通例もとのウタキの方に向いている。ついでウタキの構造に関しては、最も神聖視される場所は、イビ・イビナー・ウブなどと呼ばれ、通例此処に神木・霊石・香炉などが置かれて崇拝の対象になっているが、多良間島のウタキにはイビに該当するところがない点を指摘する。またウタキの構造には神木が重要な要素となるが、その種類は気温・地質・拝所の位置などの自然環境的要因に支配されることが多い点に注意している。

第4章「ウタキの信仰」では、まずウタキの祭祀方式を、祭日・祭神・司祭者・物忌み・神供・共同飲食・禁忌などの諸項目にわたって詳細に記述する。ついでウタキの性格に関しては、実際の墓地と見る説を批判し、多くのウタキは清まった祖霊を祀る二次的なものと推定し、その他の要素としては争乱時代の死者の怨霊を慰めるために祀るようになったウタキもあるとしている。

第5章「聖地信仰と神歌」では、音楽という角度から聖地信仰を論じているが、神歌を通して与那覇集落の数多いウタキに祀られる神の性格究明を試み、また小浜島ではヤラブの木で作った太鼓が海からの来訪神を呼び寄せる霊力を持つ点を指摘する。

第6章「聖地信仰の変容」は2節に分かれる。第1節は王朝時代から明治に到るまでの時期を取り上げ、王府が数回にわたって出した祭祀に関する禁止令が、それまでの聖地信仰を大きく変容させた点を指摘している。第2節では明治以降現在に到るまでの時期を取り上げ、聖地信仰の変容を促がした原因として、社会的側面では学校教育の普及、婦人会の社会改正運動、創価学会など外来宗教の影響、都会に働きに出たものによる影響、などを指摘している。また、地理的変化として、開発に伴う海岸埋立て、土地改革、飛行場や観光施設の建設などによって、ウタキそのものが姿を消しつつある点を指摘している。

審 査 の 要 旨

奄美諸島、沖縄諸島、宮古・八重山を含む先島諸島、この3地帯の民俗や言語にはきわめて近似性があり、共通の基底を持つものとされている。したがって、民俗学的調査研究の対象なり範囲としては、南島なり琉球弧と呼ばれるこの3地帯を含む一帯とならざるを得ない。筆者が取り上げたウタキ（御嶽）の信仰は、南島における聖地信仰の中核を成すものであるが、今日そのあり方と信仰内容はきわめて複雑多様である。このような状況の中で、ウタキ信仰の本質を探るとなると、筆

者が意図する民俗学の方法はきわめて有効であろう。すなわち現在各地でさまざまなタイプのウタキ信仰が認められるわけであるが、それらの資料を類型化し、これをたんねんに比較研究することによって、ウタキ信仰の変遷を描き出すことができるはずである、とするのが筆者の立場である。こうした意図は本論文においてかなりのていど成功している、と認められる。

筆者は調査地として沖縄諸島では久米島、宮古諸島では与那覇と多良間島、八重山諸島では小浜島の4地域を選んで、長期住み込みによるインテンシブな調査を実施している。奄美諸島においても各地に神山・オボツ山・オガミ山などと呼ばれる聖林があり、これらも沖縄でのウタキ信仰と同じ系統に属するものであることが知られている。こうした奄美の事例をも比較考察の範囲に入れるべきであり、筆者に残された課題となろう。しかし、南島的な民俗の在り方を探ぐるとなれば、沖縄と先島とのつながりの方が密接であり、筆者が沖縄諸島、宮古・八重山諸島にまず調査の焦点を据えたことは許されてよいであろう。筆者が選んだ4調査地は、小浜島を除いては従来ウタキ信仰についての報告資料の乏しい地域であり、それだけに筆者による綿密な調査資料は、その資料価値が高く評価されよう。

筆者はウタキの実態を正確に把握することから出発して、ウタキ信仰を構成する諸要素を比較考察することによって、後世新たに附加されたと判断できるものを取り除く作業を通じて、より古風な姿を推定するという方法をとっている。たとえば先島の3地域では、鳥居を備えたり、本土の神社様式に似た神屋なり拝所を構えたウタキを多く見かけるが、このような要素は、新たな変化部分として取り去って考えるべきであるとする。しかしこうした変化部分を持ったウタキ全体を、新しい成立ときめつけることができないことはもちろんである。新たな変化と併存する形で古風な要素が存在し得るとする観点に筆者が立っていることは好ましい。

ウタキ信仰の本質なり祖型をどこに認めるべきかについては、筆者はなお慎重であるが、18世紀初め「琉球国由来記」が編纂された際に、首里王府からの質問書に「御嶽」という名称が用いられたのが、その後一般化したと考えられるし、いわゆるウタキ信仰の内容も琉球統一当時に大きく変容したとするのが、筆者の一つの推定である。この推論をより確実なものに高めるためには、取り上げた4地域以外の幾つかの地域に手を伸ばして比較考察を試みる必要があるし、その段階では当然奄美諸島をもその視野の下におさめることが要求されよう。

本論文には、ウタキ信仰に関する独創的な見解が随所に示されており、高く評価されるが、特に筆者自身による長期にわたる実態調査の緻密な観察に基づく資料が豊富に提示されており、それ自体きわめて貴重なもので、学界に寄与するところ大なるものがある。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。